

特集

つがるりょうげんろくくにえ ずうつし 「津軽領元禄国絵図写」について

附属図書館長 長谷川 成一

弘前藩が江戸幕府に提出し、正本・写ともに失われたと考えられていた「津軽領元禄国絵図」の写が2008年8月に弘前大学附属図書館から発見された。同絵図には弘前城下をはじめ、約300の村名などが記載されており、主要交通路、白神岳などの山岳や河川、各村の村高も書き込まれ、当時の津軽領内の地理、経済などの膨大な情報が図中に込められている。原図の縮尺は、2万1600分の1である。



附属図書館3階に展示中のパネル（大きさは1／2）

されていた全国の国絵図の大部分が、天保国絵図を除いて焼失した。

現在、津軽領の国絵図としては、正保の写が県立郷土館に、天保の正本が国立公文書館に所蔵されているが、前述のようにこれまで元禄の国絵図は発見されていない。

絵図は縦3メートル38センチ、横3メートル96センチ。狩野派の絵師が、現在の津軽地方を中心とした当時の津軽領全域を描いている。

津軽領の国絵図は、正保^{しょうほう}国絵図（17世紀前半）、天保^{てんぽう}国絵図（19世紀前半）の両絵図が現存しており、当絵図は、両時代の空隙を埋める資料的な価値はもちろん、全国の国絵図研究などにも影響を与える貴重な資料として関係者の注目を集めている。

津軽領の国絵図は、資料上、作成が確認できるのは、正保、元禄、天保の3回だが、明治6年（1873）の皇居炎上により、幕府に收藏

絵図には、「元禄 14 年（1701）11 月 津軽越中守」との書き入れがあり、幕府が提出を求めた時期と一致する。また、正保国絵図にあった航路や松前領の記載がなく、正保期にはあった 3 つの郡（田舎・鼻和・平賀）を「津軽郡」とまとめて表記するなど、当時、弘前藩が幕府から示された元禄国絵図作成のマニュアルに従った記載が随所に見られることから、元禄国絵図と確認された。当絵図は、弘前藩が幕府へ提出しようとした最終段階の下図か、控図の写しとみられる。

絵図には津軽郡の石高が、10 万 3097 石 1 斗 5 升と記され、元禄時代には既に 10 万石以上の実高であったことが分かるほか、盛岡・秋田両藩との藩境が詳しく描かれ、当時の幕府が藩境の確定に意を用いた様子がうかがわれよう。

（はせがわ せいいち）

「津軽領元禄国絵図写」を一般公開

昨年 8 月に弘前大学附属図書館の郷土資料から発見され話題となった「津軽領元禄国絵図写」が、青森県立郷土館の特別企画展「新発見津軽領元禄国絵図」（会期 5 月 10 日～19 日）において一般公開された。

この企画展では、青森県立郷土館所蔵の「正保国絵図」、弘前市立弘前図書館所蔵の「天保国絵図関係資料」及び「慶安の御郡中絵図」など江戸初期から後期にかけての津軽領の主な国絵図も一堂に公開されており、江戸時代の津軽地方の村落や領内の移り変わり、江戸幕府の国絵図作成の意図の変遷を伺い知ることができた。タテ、ヨコ 3～4m 四方の巨大な国絵図の並ぶ展示会は全国でも珍しく、壮観であった。



青森県立郷土館ホームページ

<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html>